

私のまわりの子どもたち

大塚 房

私の保育園は、母子寮が隣接し、園児の二十五パーセントが単身家庭です。そしてその大半は母子家庭と
いうのが現状です。子ども達はいろいろな問題を背負
わされておりますがここにあげましたのはその一例で
す。

M子の場合

父親が賭け事で借金をつくったため、母親が一方的
に離婚し、母子寮に入居しました。その年にM子は年
少組に入園。母親はいつも気持ちが悪く不安定の上、ヒス
ティックな状態でした。

病院で検査をしても、どこにも病氣らしい兆候は認

められませんでしたが。しかし、福祉事務所に身体の異
常を訴え、働く事が出来ないなどの理由で生活保護を
受けていました。自分は立場が弱いことから、何でも
やってもらうのが当たり前という気持ちが強く、福祉事
務所から、再三就労指導があることへの不満を周囲にあ
たり散らしていました。

母親の感情まかせの環境にいるM子はいつもオドオ
ドとしており何事にも自信がなく、身体を小刻みにふ
るわせ、話す時も視線を合わせない有様でした。新ら
しい経験をする事を極度に嫌い、どうしてもしなければ
ならないとなると、全身で抵抗したり、時には恐怖

の表情さえみられました。

このような状態のまま保育園生活も年中組に進級しました。母親は以前と変わらずM子はその反発を登園拒否という形で次第にその傾向を強めました。M子の言動にイライラすると、「お前の悪い所は皆父親と同じだ」と当り散らすかと思うと訳もなく甘やかしてみたりで、子どもの母親への不信任は強まる一方でした。

そのような時期に父親がM子に面会にきました。久しぶりで嬉しかったのでしょう、M子は「お父さんが好き」といった事で、母親は逆上し、M子の目の前で洋服、玩具を全部処分して何一つもたせずY市に住む父親のアパートにM子をおき、母親だけが帰宅しました。

帰宅直後に、母子寮、保育園ともに、退園の届出の手続きで来園しました。母親といろいろ話し合ひ中で「貴女も自分のお母さんの暖かい思い出があるでしょう。M子ちゃんにも最後に親としてやってあげる事は

ないかしら……。」というのと、「私は母親はいるけれど親がいると思つた事はない。」とこれが答でした。

いろいろな曲折を経て、M子は母親の許に戻りました。その後も暫くは、母と子の冷たいたかひが続きました。M子が年長組に進級してから母親も、少しずつ働くようになりようやく生活に落ち着きが見えている状況です。

保育園は、子どもの保育だけでなく、保護者への対応指導が保育を円滑にするポイントを考え日常の中で常に配慮しております。

先きの例は離婚した母親全部とは云えません。しかし未婚の母親等も含めて、幼い頃の自分の母のあり方、生き方、育て方が将来の人格に影響するということが云えるのではないのでしょうか。

母親の役割りの重大さを痛感しているこの頃です。

(港区・南青山保育園)